

# 『ちとせ歴史ものがたり』『バランス』秘話

渡 辺 敏 子

千歳市民文芸の会事務局長

平成二十二年十二月、長見有方氏が『ちとせ歴史ものがたり』を出版した。これは千歳市の『広報ちとせ』に、昭和五十一年六月号から五十八年一月号まで、二三回にわたって掲載された作家長見義三の「市史つれづれ」を収録したものである（長見義三『増補千歳市史』編者）。

長見義三を偲ぶ会・白雲木祭はくうんぼくさいに関わった人々、約一〇〇人には有方氏から直接送られた。希望者には提供したいとのことで、北海道新聞社千歳支局、千歳民報社が窓口となり約一五〇冊が配付された。その後、各方面からの希望者が多く、合せて三〇〇冊余が市民に配られた。

『ちとせ歴史ものがたり』は前編に「市史つれづれ」を、後編に小編・エッセイほか三編を収録している。



写真1 長見義三  
明治41(1908)年~平成6(1994)年

『ちとせ地名散歩（S51北海道新聞社）』、『ちとせのウエペケレ（H6響文社）』、『ちとせ歴史ものがたり』、『ちとせ歴史ものがたり』は、長見義三が愛した千歳の三大集大成として街の宝であり、誇りでもあると私は考えている。この『ちとせ歴史ものがたり』後編に収録されたエッセイ「バランス」につい

て小山心平氏こやましんぺいから有方氏宛てた一通の手紙がある。小山氏は平成二十二年四月に急逝した。

有方氏の了解を得て、その一部を紹介させていただく。（ルビ引用者）

長見有方様

お父様の遺稿集『ちとせ歴史ものがたり』落手しました。ありがとうございます。

一気に読了しました。

僕が千歳の学校に赴任したのは昭和四十四年ですから、要員が保護者に関する関係もあつてクマ基地をつぶさに見ています。読みながら当時のことを思い出しました。

「バランス」では、北方文芸掲載直後に先生に誤認箇所をお伝えしようと思つて、結局しなかつた記憶も蘇ってきました。それは、訓練中零戦れいせんの墜落事故で犠牲になつた方のひとり下田恵子さんのことです。

久遠村警察署長だつた下田さんの父親が襲われて殉職したのは大正十五年で、その頃に恵子さんが生まれました。ですから、昭和二十年に父親の訃報で故郷に帰る予定だつたというのは、誤りということですよ。

なぜ下田さんについて僕が知っているか、といいますと久遠村警察署長殺害事件の犯人逮捕について冤罪事件のひとつとして調べている最中だつたからです。

久遠郡大成町の高校に三年間勤めることになり、地元の人達の話をもとに後日書いた中篇が「ウタの痕跡」です。

その頃、亡き下田恵子さんの七重浜の実家には高齢の母親も存命でしたが、夫が遭遇した事件の真相を知るほどに、僕は訪ねて取材する気にはなりません。

一方で、真犯人であつたらう元部下の羅卒（巡查）が左遷先の奥尻島で溺

死したり、その妻だった人が青函連絡船から身投げしたりの怪死によって、事件は闇に紛れてしまいました。(後略)

二〇一〇年十二月 小山心平

「バランス」の誤認箇所というのは、昭和二十年七月十日海軍千歳航空基地で訓練中の零戦が、市街地に墜落して四人が犠牲になった記述である。その中の一人、下田恵子さんについて次のように書かれている。

下田さんは函館高女の出身で、家は七重浜にあった。警察官であったお父さんが殉職したので、航空廠をやめて郷里に帰ることになり、この日午前中の作業だけはし、午後被服を更えて物資部に挨拶にきて遭難したと言われている。

誤認箇所の訂正なら、ほんの数行ですむことなのだが、残された小山氏の手紙から、言い知れぬ悲劇の一端を垣間見ることになってしまった。言い換えるなら、『ちとせ歴史ものがたり』の誤認箇所は、多くの人には知られず、時間の中に紛れてしまった関係者の悲しみの声の糸口として、そこにあるのかもしれない。

それは闇の中から聞こえてくる悲しみの声でもある。

恐らく小山氏も、関係者の悲しみを闇に葬ってしまうことはできなかったのだろう。平成十二年七月発行の『山音文学』(山音文学会) 96号に小説「ウタの痕跡」を発表している。作品は下田さんの父親が殺害された事件を核とした、あくまでも創作であるが事件の概要は真実であろう。

大正十五年に起きた警察署長殺害事件の諸事情を越えて、関係者の魂が少しでも慰められることを祈りたいと思った。ひいては、小山氏の供養になることを願って、「ウタの痕跡」をかいつまんで紹介させていただきたい。

なお、これについては苦小牧市在住の『山音文学』編集人・入谷寿一氏



写真2 『ちとせ歴史ものがたり』と『山音文学』

物語は一二の章で展開されていく。

小山氏の手紙から察しがつくように、師走八日、遠磯村警察署長が何者かに大怪我をさせられ、一日後息を引き取る。警察署と村役場共催の、前代未聞の葬儀が執り行われた。

年が明けて、後任の署長が着任、カニトリザワ派出所の森田巡査が離島に転勤となる。大蔵署長はこの森田巡査に日頃から辛く当たっていたらしい。転勤は左遷と噂は広がるが、村人は無関心を装うことが暗黙の申し合わせであった。

事件発生から二年後の四月、川田四郎が大蔵署長殺しの真犯人として逮捕される。

数日後、川田家の長女が出走、四郎の妻は心労から寝込んでいたが、ほどなく死亡する。川田家の長男(浩の父)は勤め先の村役場に辞表を出し、遠磯村を出て行った。

一方、離島に転勤になった森田巡査はその年の五月、気が狂って島の崖から投身自殺をしたとの噂が伝わる。さらにその翌年、森田巡査の未亡人みよが青函連絡船から身投げして行方不明になったという噂も届いた。すると当

の了解を得た。

「ウタの痕跡」は遠磯村の浜辺にたたずむ川田浩の登場からはじまる。一一年振りには故郷の海を眺めているこの浩、実は昭和の初めに起きた遠磯村警察署長・大蔵忠殺害の犯人とされた川田四郎の孫である。

初、支配的だった川田四郎冤罪説にとって代わって、川田四郎下人説が主流になっていく。

川田四郎は投獄二七年目に恩赦で釈放されるが、その一カ月後に死亡する。

四郎の孫浩は苦渋の少年期を過ごし、写真技師となり、故郷の老写真技師の娘裕子と結婚する。裕子の父が、浩に「ウタの乾板があるはずだ」と今際（いまわ）に告げる。

それから物語は浩の「ウタ」の解明へと導かれる。

「ウタ」とはアイヌ語の「オタ」、つまり「浜」のことだった。義父の残した乾板に写っていたものは、検死のために横たわる大蔵署長の遺体、死因となった傷、浜の崖の上のなで切りされたスキの跡。これらから、漁師であった祖父四郎は漁師用のマキリで刺したとされているが、それは不可能だと判明する。

立ったままで振り下ろして足元に届く刃物、「そうか、サーベルだ」と浩は思わず呟いた。

義父が今際に言い残した一言は、遠磯の村民の多くが事実を知らながら、決して口にしよとしない真相を暗示していた。

ここで再び「バランス」を読み返してみる。

『北方文芸（北方文芸刊行会）』昭和五十六年五月号に掲載された作品である。

内容の軸になっているのは「海軍航空隊千歳基地の訓練中の零戦が、市街に墜落して、次の四人が死亡した事故であった」という記述である。

事故当日、外で遊んでいた兄弟の兄・佐藤拓君に事故の様子を取材する目的で会っている。「バランス」を要約すると事故の様子は次のようであった。

夏の暑い日、ヒロム君は父が買ってくれた、菱餅のような平たい板を大中

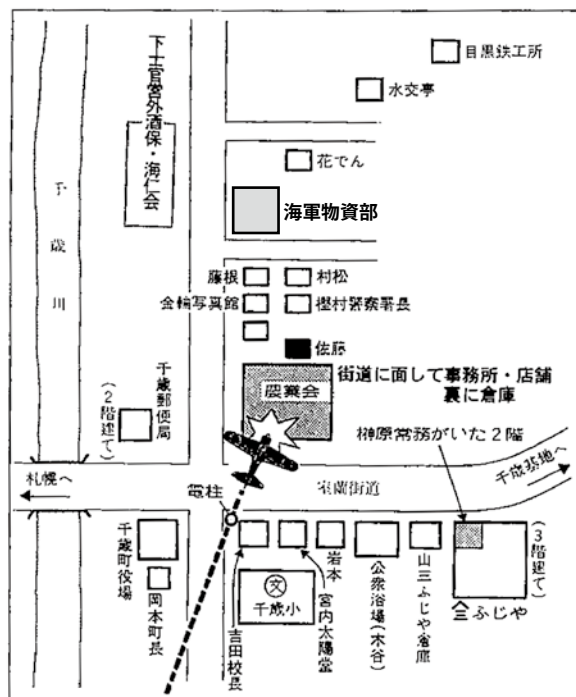


図1 零戦墜落事故現場見取図  
杉村機は農興会倉庫に墜落したが、エンジンが離脱し物資部まで跳んだ。エンジンが3人を死亡させた(M)。  
(藤井貞雄編『千歳特攻隊始末記』(S59)から転載・補正)

小と三枚重ねた形の軍艦を盥たらいにかけてあそんでいたが、どうしても右に傾くので、バランスをとるために左に何か乗せたいと思い、小石を探そうと立ち上がった。これが小学二年生。そのとき、学校のほうから突っ込んでくる飛行機が目に入る。とつさに家に駆け込んで助かることになる。

弟の茂君は、金輪をまわしてあそんでいたが、家の横から抜け出したばかりのところを仆たおれていた。体のどこにも傷は受けていないのに死んでいた。

これは、助かった拓君の証言である。取材した当時は四四歳になっていた。

「バランス」に最初に触れた読者はどう感じたであろうか。  
長見義三は直接零戦の事故を語るでもなく、子どもの遊びの中でバランスをとるといふ行動に深い関心があるかのような書き出しをしている。その関心度の深さは、文中でも繰り返している。

しかし、この取材に対して、どこか気乗りしない筆運びさえ感じさせる。

なぜだろうと、思ったのは、私だけだろうか。

だが、小山氏の「ウタの痕跡」を読み終えると、「バランス」は最初とは違って見え始めるのだ。

事故に直入するのではなく、側面から事故に触れていく手法である。

長見義三は、「私はあまり気がすまなかった。実のところ、当時の事情は記録されていなかったために、あまりよく知られていなかったが」と、当時の実情を述べ、しかし、「その後、当地の道新支局の取材などで一応明らかになってきていた」とある。

死亡したのは（年齢は数え年）、

杉村 裕 海軍少尉（零戦操縦士） 二三歳

佐藤 茂 和男次男 六歳

下田 恵子 女子挺身隊員 二二歳

三川 一郎 一九歳

三川一郎さんについては特に記録がなかったようだ。下田さんとともに犠牲になったことから、男子挺身隊員だったとも考えられると記述されている。道新藤井支局長の調査で、三川さんは東京出身で北海道疎開中に動員された挺身隊員とわかった。

下田さんについての記述をもう一度引いてみると、「警察官であったお父さんが殉職したので、（略）郷里に帰ることになり（略）午後被服を更えて物資部にきて遭難したと言われている」（傍点引用者）。

気乗りのしない書き出し、事故を側面から述べていく手法、そこにいくつかの作家の暗示が見え隠れしていることに、ようやく気付かされる。

下田さんについての記述は、確かに誤認という形で残された。が、実



写真3 「ユリノキ散策会」時の小山心平氏と筆者（平成17年6月 札幌）

は長見義三はある程度知っていたと思えてならないのだ。

先に書いたように、小山氏による誤認箇所の指摘によって、読者にはそれが事件に翻弄された人々の悲しみの声へと繋がる糸口となった。

小説「ウタの痕跡」に出会わなければ、「バランス」は微かな疑問のまま通り過ぎてしまったかもしれない。

真実に触れることは、大正十五年の不幸な事件に巻き込まれた人々の悲しみをむき出しにすることになる。そして自身の内に起るアンチノミーは誰の救いにもならない。作家はあえて事件に触れなかった。

読者を信頼して書かれたエッセイ「バランス」は、プロの作家の手法による優れた文学作品であることを再認識しなければならぬ。

ここまで来て私はふと、小山氏も同じことを感じていたのではないかという想念に囚われた。

久遠郡大成町（旧・久遠村）での三年間、小山氏は下田さんの母親が存命であることを知っていた。事件の真相を知るほどに、訪ねて取材する気にはならなかった、と有方氏への手紙で告白している。言うなればそれは長見義三と同じ心情である。

そこで小山氏は、無実の漁師川田四郎の孫、川田浩という架空の人物にスポットを当てる方法で小説を書き上げたのだ。

「ウタの痕跡」を発表したのは平成十二年、長見義三没後六年であったことは、師への気遣いのみでなく、事件に巻き込まれた人々と共に苦しんだ年月でもあったろう。

『ちとせ歴史ものがたり』に収録された「バランス」の誤認箇所訂正と、それを指摘し、闇に紛れてしまった悲劇を炙り出した小山氏の「ウタの痕跡」を紹介するつもりで書き始めたこの一文が、結局は長見義三が優れた作家であることを再認識することとなった。それはかえって喜ばしいことではあった。

下田さんが事故にあった海軍物資部は、東雲会館横の駐車場にあった。六六年も経ったが、犠牲になった四人の冥福を心から祈りたい。

そして、下田さんを糸口として、計らずも触れてしまった、大正十五年の不幸な事件の犠牲者、翻弄された人々の魂が安らかであるようにと願ってやまない。

#### 参考

【長見義三】明治四十一年五月十三日長沼に生まれる。小樽中学四年終了後、道農産物検査所に勤務。昭和二年、「小樽新聞」の懸賞小説に第一席入選。その後早稲田大学教授、谷崎精二を頼って上京、入学する。在学中『文芸』に「ほつちやれ魚族」を発表、室生犀星が激賞。第三次『早稲田文学』『新潮』に作品発表。この時期もつとも期待された作家である。

代表作『姫鱒』は昭和十四年第九回芥川賞候補となる。作品は、アイヌ民族をはじめ社会の底辺に生きる人々の哀歓を、繊細な文体によって叙情的に描いている。その半生を千歳に住み、昭和五十二年文学的半生記『白猿記』を書いた。（『ワセダと現代の作家たち』早稲田大学図書館編、平成元年）

郷土史の造詣が深く、昭和二十一年ウサクマイC遺跡発見。昭和五十年千

歳を知る会、五十三年千歳文化財保護協会の設立に尽力する。

昭和五十八年発行の『増補千歳市史』編者。平成二年北海道文化賞（文学・小説（評論）受賞。五、六年に恒文社から『姫鱒』、響文社から『アイヌの学校』『別れの表情』『北の暦』の作品集四巻が相次いで復刻出版される。

平成六年四月二十一日没。

【白雲木祭】長見義三を偲ぶ会の名称。平成十年から十六年までの命日墓参、故人の愛した白雲木の花の咲く六月中旬に偲ぶ会が行われ、これらを白雲木祭と呼んでいた。二十二年に白雲木祭がきっかけとなり、市立図書館に「長見義三常設展示コーナー」が開設された。

【小山心平】本名 小山政弘

昭和二十年三月十二日札幌村字烈々布（S30・札幌市編入↓栄町）に生まれる。北海道教育大学、酪農学園大学卒。四十四年から四十八年まで千歳中学校に勤務。この時期に長見義三と出会い、生涯長見を「先生」と慕う。五十七年から六十年まで、後に発表する小説『ウタの痕跡』の舞台である久遠郡の大成高校に勤務する。教員生活二〇年の後に作家。

著書に『夢の国日誌（風媒社S62）』などがある。

平成二十二年四月一日、六五歳で急逝。